

序

歴史を紐解くと、国や地域を運営する上で交通が非常に重要であることは、かなり以前から認識されていることがわかる。例えば明治期には国土の急速な近代化を図る上で鉄道整備にかなりの予算を割いており、大正期でも地方部の鉄道未整備地域への路線網拡大に注力している。戦後では、交通と産業との関わりが強いとの観点から、港湾整備や鉄道の輸送力増強等が行われてきており、近年でも、生活に密着しているとの理由から、公共投資に占める道路整備費はかなりの割合に上っている。このように交通が地域や国土と密接な関係にあることは基本的には認識されている。しかしながら、近年の大都市圏集中の問題や交通網整備の際の採算性の議論などをみても、必ずしも交通と地域の関係が国土整備や交通網整備の政策・制度に適切に反映されていないと言える。

我が国のこのような歴史的な交通網整備によって、全国各地域の相対的な位置関係は変化してきている。明治期以降の鉄道網の全国的整備は、まず東京と全国各地域とを結ぶことが目指され、東京を中心とする国土の骨格をなす幹線鉄道、幹線と地方都市を結ぶ亜幹線の順に整備が行われ、大正期頃までに完成している。だが、個別の地域を見ると早期に鉄道整備が行われたところと、相当遅れたところが存在しており、国土構造の形成過程に大きな影響を及ぼしてきたと考えられる。このような変遷は戦後においても見られ、輸送力の逼迫した大都市間などにおいて、鉄道の線増・電化や航空路線の開設などが行われ、その後、全国的な高速交通機関の整備が行われるようになっている。

交通網の整備状況は産業の生産性との関連が大きいだが、交通網整備が早期に行われた地域とそうでなかった地域では、地域の発達にも大きな差があったと考えられ、長期のうち一部地域では各種の機能が集中する一方、そうでない地域では衰退が進み、国土構造は変化してきている。

このような地域変化に伴い、戦後になって過疎過密の問題が顕在化し、“均衡ある国土”を目指した全国総合開発計画以降の一連の政策が打ち出されている。しかし、その効果に関しては政策開始後三十数年になるが、未だ定量的には明らかにはされておらず、政策が地域に与えてきた影響の明確な把握がなされないまま、次なる新たな政策が策定されていると考えられる。

本研究は、上述の問題点に関し、明治期以降の国土の発展過程における交通網の整備政策の長期的な効果を確認すること、即ち、政策の事後評価を行うことを目的とした実

証的研究であり、以下の各点が主な特徴となっている。

- ・我が国の交通と国土の整備に関する政策および制度について、その歴史的な経緯と現在の特徴と課題について整理を行う。
- ・明治期以降の都道府県間の所要時間の変遷を明らかにすることで、地域の相対的位置関係の変遷を計測する。その際、所要時間指標は都市間交通の特徴を考慮したものを採用し、指標の定義・特徴・有効性を示す。
- ・明治期以降の我が国の地域間交流可能性の変遷を明らかにするとともに、交流可能性から見た地域間の結びつきの構造についての変遷を分析する。
- ・交通整備が地域に及ぼす影響を明らかにするために、交通整備と国勢調査開始以降の全国全市町村の人口推移との関係を分析する。
- ・都市間交通網整備が各都道府県の人口や産業機能などに与える長期的影響について分析する。
- ・全体の分析結果をもとに、交通網整備が地域の変化と発展において果たした役割および交通網整備政策の長期的効果について考察する。

研究にあたり、交通網が社会のストックとして極めて長期間にわたって機能し続けるものであること、交通機関は離れた地点間を結ぶことがその基本的な機能であるため、交通がネットワークとして整備されていれば影響がかなり遠方まで及ぶこと、等を考慮し、長期的・広域的な視点から分析を行っている。

このような研究により明らかにされる政策長期的効果は、今後の国土政策に反映されるべきものであるが、現在の我が国の政策プロセスそのものが旧来の政策結果を確認した上で新たな政策を決定するような構造になっていない可能性があり、本研究はこの段階まで言及するには至っていない。しかし、これまで定性的な議論に止まっていた政策の長期的な影響を定量的に明らかにすることによって、本研究の所期の目的に対して一定の成果を得たのではないかと考える。

平成10年 1月

波床正敏